

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

「大学ランキング」に翻弄(ほんろう)されるマレーシアの中堅大学

久志本裕子 (上智大学総合グローバル学部准教授)

「大学ランキング」を日本のメディアでも目にするが増えている。日本の大学でも徐々に意識が高まっているが、マレーシアでは教育省の大本令でランキング向上が目指されてきた。筆者は、2014 年から 19 年までマレーシア国際イスラム大学 (I I U M) に勤務し、いわば参与観察をする機会に恵まれた。そこで見た大学ランキングの影響を、フィールド報告として共有したい。

勤務を始めて間もない 15 年、マレーシア教育省が『マレーシア教育ブループリント (高等教育)』を発表し、25 年までの教育の目標を明確にした。この中で「大学の質」の向上に関しては、25 年までに英国の大学評価機関クアクアレリ・シモンズ (Q S) が発表する大学ランキングで、アジア 25 位以内に 1 大学、世界 100 位以内に 2 大学、200 位以内に 4 大学をランクインさせる、という数字が明示されている。

これが「大学の質」を測る基準としてふさわしいかの議論はない。マレーシア政府はこの目標を達成すべく政策を進め、22 年現在、マラヤ大学は世界 65 位 (15 年は 151 位)、アジア 8 位という、目標以上の成果を上げる結果となっている。

筆者が勤務していた I I U M は同じ公立大学とはいえ、「リサーチ大学」として重点化されたマラヤ大学などに比べて「格下」の位置付けであり、Q S 世界ランキングの順位は 15 年の 550 位から 22 年には 650 位と下がっている。国を挙げたランキング向上の取り組みがこのような中堅大学にもたらしたものは、余計な書類書きと、手っ取り早く数字で成果を出すことを優先し、そうでない仕事は極力しない精神ではないかと思う。

大学のランキング向上を目指す政府が各大学に求めたものは「数字を出すこと」であった。学期ごとに行われる教員評価では、国に定められた大学ごとの目標から割り出された、個々の教員の数値目標の達成度を点数化して記入する。

文系の助教であった私のノルマは 1 学期当たり 1 本の論文を、S c o p u s という国際的にそれなりの評価があるとされる雑誌リスト (ほぼ英語ばかり) に載っている国際学術雑誌に掲載し、それ以外の論文を少なくとも 2 本執筆することであった。

日本の地域研究では学術論文は 1 人で執筆するのが

基本なので全く無理な数値目標なのだが、なんと著者が 10 人の共著論文でもカウントは同じ「1 本」なので、まずは大人数での共著が大学から勧められる。研究倫理的にグレーなケースもめじろ押しである。

研究資金にもノルマがあり、1 学期当たり最低 5,000 リンギ (約 15 万円) の研究予算を自分で取ってこなければ研究予算はほぼゼロであった。とにかく外部予算に応募することを求められるが、マレーシア政府の研究予算は非常に競争率が高いので、日本のトヨタ財団などの申請時には日本に何の関心もなかった研究者もこぞって日マ比較研究の計画を提出する。

これらのノルマは他の会社などでも使われる「重要業績評価指標 (K P I)」という名で呼ばれるが、とにかく皆が真剣にも冗談にもこの語を日々口にした。

I I U M は理念として「知識のイスラム化」を掲げており、西洋中心の知識の生産と流通、つまりは大学ランキングの上位を欧米の大学が占め、欧米の学術雑誌だけが高く評価されるような世界システムを批判する立場にあったはずなのだが、現状ではまさにそのシステムの沼にはまっているようにみえる。

もちろん、そうした中で大学を支えているのは、システムがどうなろうと熱意を持って工夫を凝らした授業を行い、日本の大学の感覚では驚くほど学生に親しまれている、個々の優れた教員たちである。ここに記した状況を粘り強く批判し続ける研究者も少なからずいる。

教育や研究の手法を共有する研修も多く、I I U M の先生たちから学んだことは私の一生の宝である。今回の記事で「大学ランキング」に過度に振り回されることの怖さが少しでも伝われば、そうした先生たちへのわずかな恩返しになるかもしれない。

< 筆者紹介 >

東南アジアのムスリム (イスラム教徒) 社会を文化人類学の視点から教育・知識伝達のプロセスに着目して研究している。主著に『変容するイスラームの学びの文化 マレーシア・ムスリム社会と近代学校教育』ナカニシヤ出版 (2014 年)。19 年から現職。